

## 心の苦しみ

板橋区立志村坂下小学校6年生

小林 純一郎

僕は9月に社会科見学として昭和館を訪れました。その時は、様々な展示物を見たり、体験したりしました。けれども、展示物から、それにどのような願いや思いがこもっているか、というところまで考えることは時間の都合上できませんでした。そのため、より細かいところまで見たいという気持ちが芽生え、再度来館することにしました。そのときは自分のペースでじっくり展示について考えることができたので、前に来たときとは違い、それぞれの展示物に込められた思いも伝わり、一つ一つに感動してしまいました。

展示物はたくさんありましたが、一番心に刺さったものは、中国へ従軍した兵士が妻や子供に宛てて書いた手紙です。その手紙には会えない家族への想いがつづられていて、戦争に行った兵士一人ひとりに帰りを待つ大切な人がいるのに、会いたくても会えないという苦しさを感しました。昭和館ではほかにも、地域別の戦没者数が書かれている地域別戦没者数概見図というのを見ました。その図によると、合計戦没者数は240万人でした。先程の手紙とつなげて考えてみると、240万もの人が、家族や友人に会いたくても会えずに悲しみながら死んでしまったと推察できます。

僕の曾祖父は、第2次世界大戦を経験しました。彼はすでに亡くなっていますが、戦争で彼が体験したことを詳細に記した自伝を残しました。それには、曾祖父が朝鮮とビルマの2箇所に合計8年間滞在したときのことについて書かれていました。8年間も戦争にかり出されていたということは、展示されていた手紙の兵士が感じていた家族に会えない苦しみを曾祖父も経験していたということだと思います。そう考えると、今まで他人事だと思っていた戦争が、僕の身近な人も含めた何千万人もの人々にトラウマを植え付ける、言い表せないほど悲惨なものだったことが身に染みてわかってきました。

現在では、ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナなどたくさんの地域で戦争が起こっています。その戦争に参加している兵士たちは、国からの命令で戦いに行かされて大切な人と会うことができなくなっている状態の人がほとんどです。第2次世界大戦で戦争に参加した世界中の人々が体験したような苦しみを感している人が現代でもたくさんいるのでしょう。

戦争には、人の命だけでなく人の心までも壊す力があると思います。その戦争の恐ろしさ、悲惨さをこれからの世代にも語り継いでゆき、戦争をどのようにしたら止めることができるのかを考え続けていくことが世界から戦争をなくすための第一歩になるのではないかと思います。そのためにも、僕は今回昭和館に行ったことで得たこのような考えをこれからも忘れずに胸のうちに留めておきます。

## 審査員からのコメント

### 【岸本葉子さん・エッセイスト】

「心の苦しみ」のタイトルの示すとおり、展示物に込められた「思い」を知るという、自分なりのテーマを設定し、再訪した姿勢に打たれる。昭和館で読んだ兵士の妻子に充てた手紙と、家の曾祖父が残した手記とを重ね合わせ、銃後の人々の苦しみと出征兵士の苦しみとの両方をとらえ、80年の時を超えて「自分事」として感じている。過去の戦争にとどまらず現在も世界にある紛争に思いをいたし、平和のためにできることを考えている。

### 【関沢まゆみさん・国立歴史民俗博物館教授】

小林さんの「心の苦しみ」は、昭和館でみた兵士の家族への手紙から、外地での曾祖父の戦争体験について8年間も手紙の兵士たちのように、家族に会えない苦しみを味わっていたのかと想像し、それまで他人事だった戦争が身近なものになったという変化が書かれています。そして、現在のロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナの戦闘に関わっている兵士とその家族へも想いを寄せているところがよいと思いました。

### 【伍藤忠春・昭和館館長】

昭和館を二度も訪問して考えをまとめた熱意に感動しました。

曾祖父から聞いた具体的な話を、昭和館の歴史資料(戦没者数など)や現代の地域紛争と関連付けて考える想像力や共感力を感じさせます。